

僕の記憶がなくなる前に
伝えたいこと

作：必然

目次

- ・ 鳥の時間
- ・ 映像
- ・ 光
- ・ フェール
- ・ 草原
- ・ 薄暗い部屋
- ・ 僕の記憶がなくなる前に伝えたいこと

お母さん
僕は昔鳥だったんだよ
でも全然飛べなかったけどね

鳥の時間

生まれて気が付いたらそこにいたんだ
広くて薄暗い場所
そこに羽も生えていない子供の鳥がたくさんいたんだ
僕もそのひとり
たくさんいたんで歩くのもやっとだったよ

僕はそのときのお母さん知らない
たぶん他の仲間もだれもお母さんは知らないんじゃないのかな？
でもね、淋しくなかったよ
なにか物足りなさはあったけれど
僕たちは生きていくのに必死だったんだ

ある日人間に持ち上げられ、別の場所に入れられたんだ
そこにもたくさんの仲間がいたよ
その頃の僕たちには黄色の産毛がたくさん生えていたんだ

ごはんは一日一回

同じ時間にごはんを食べ、同じ時間に眠って、同じ時間に起きる
その繰り返し

でもね、いつもごはんをくれる人間が声をかけてくれるんだ

「元気かい？」

そして

「ごめんな」って

そのときは人間の言葉も解らなくて、その意味も解らなかったけど
優しくて少し悲しい声が心地よくなって
僕はその瞬間が大好きだったんだ

何日繰り返したんだろう

しばらくして羽も生えはじめ大きくなると、また違う場所に移されたんだ。

狭い通路のような場所

今度は仲間と一列に並んだよ

前の方から仲間の声が聞こえてきてね
今まで聞いたことが無い声だったよ
絞り出すような声
それがだんだん近づいてきてね
急に前を歩いていた仲間が上に持ち上げられたんだ
人間の手が見えたよ
すぐに僕も持ち上げられてね
そこから意識がなくなっていったんだ

映像

薄れていく意識の中で映像を見たよ
僕が映ってた

生まれて間もなく親と離され入れられた薄暗い部屋
ぎゅうぎゅう詰めにされぶつかり合う仲間の体
オスカメスカを仕分ける人間の手
朝起きて、ごはんを食べて、夜眠る毎日
「元気かい？ごめんな」と悲しそうに声をかけてくれた人間の顔
大人になって仲間と一列に並んだ通路

最後の瞬間
人間の手の感触

そして、僕の死んだ後

羽や毛をむしりとられた僕の体
焼かれる音
大きな皿に盛りつけられた料理
キレイな食卓
おいしそうに僕を食べる人間の笑顔

僕の鳥での一生が一瞬にしてよぎっていったんだ
僕の飛べなかった一生
人間に食べられるための一生

だけど不思議と人間を嫌いになったり憎んだりはしなかったよ
「元気かい？ごめんな」
あの優しい声が心地よく残っていて、むしろ僕は人間を好ましく思っていたんだ
嘘じゃないよ

光

映像が終わると、上の方から明るい光が差し込んできたんだ
とても優しい暖かい光
心地よい光

僕はその光の指す方へ歩いていったんだ

だけどね、仲間の多くはその光の方向には行かないんだ

「人間に食べられるためだけに生まれてきたのか？」

「私の一生は何だったの？」

って、みんな人間や生まれた境遇をひどく憎んでいたよ

光に逆らって、逆らって

どんどん下へ向かっていくんだ

「元気かい？ごめんな」
あの声を聞いていなかったら、僕もたぶん逆らっていたのかもしれない

そのときはじめて僕はあの声の意味が解った気がしたよ
人間の言葉が理解できたんだ
たぶん、あの人間は肉になる僕たちを想って声をかけたんだ
罪の意識の中、思いやりと優しさをこめて

「元気かい？ごめんな」

僕はあの言葉に本当に感謝したんだ

70-12

気が付いたら水の中にいたよ
透き通る水色のキレイな水の中

僕の羽も脚も体も無くなっていて、ただ水の中を漂って
自分の境がどこなのか分からないんだ
たぶんこのキレイな水と一緒にいたんだと思う

「心のパール、いくつもの心が集まってひとつに還るところ」
そんな声が聞こえたよ

だけど、ただただ気持ちよくなって、心地よくなって
「ここはどこなの？」とか「何でここにいるの？」とか、もうどうでもよくなって
とにかく何もかもひとつにつながって
不安もつらさも淋しさも何も無い
時間すら感じない
すべてが完璧な場所だったんだ

だけどね、外から別の誰かが入ってくるとき
キレイだと「いい感じ」がして、キレイでないと「悪い感じ」がするんだ
すぐに水に溶けてひとつになって分からなくなっちゃうんだけど

何がキレイで、何がキレイで無いかは何となく解るんだ
たぶん、今までやってきたことや性格みたいなものが
「心」をキレイにしたり、汚くしたりするんだと思うよ

キレイだと気持ち良くなって、
汚いと気持ち悪くなって

肉体は無くなっちゃうけど心はずっとあるものだから
きっと、たくさんいいことをして心をキレイにしていくんだね

草原

急に僕はプールからすくい出されたんだ
そこは草原だったよ

プールから出た僕はね、ぼんやり丸いものだったよ
心って形にすると丸いんだね
だけど自由に動くことができるんだ

草原は広くて花がいっぱい咲いている
とても心地のいいところだったよ
草はフワフワで花はキレイでいい匂いで
僕は嬉しくなって飛んだり跳ねたり遊んだんだ

他にもいくつか丸い心がいたよ

水色 黄色 薄い黄緑

色は違うけど、みんなとてもキレイに輝いているんだ

もちろん一緒に遊んだよ
飛んだり跳ねたりじゃれあったり
楽しくって嬉しくってずっと遊んだんだ
だけど全然疲れなかったよ

薄暗い部屋

「こっちへ」
僕を呼ぶ声にして
声の方へ向かっていくとそこには高い階段があったんだ

階段を登ってしばらくすると扉があってね
その扉は開いていたんだ

扉をくぐると小さな薄暗い部屋でね

目の前には3人の人間が立っていたよ

全員男の人だった

見た目は人間だけど、たぶん違うんだと思う

その1人が「それでは」と言うと部屋の壁に映像が映し出されたんだ

人間の男の人と女の人が映っていたよ
優しい光が差す公園のベンチで2人が池を見ながら話しているんだ
とても穏やかで幸せそうに見えたよ

「お前はこの両親のもと人間として生まれ変わるんだ」
別の1人がそう言ったんだ
僕は何だか嬉しくなって
「分かりました！」
って、元気に答えたよ

僕の答えに3人とも微笑んで、そのうちの2人が交互に教えてくれたんだ

「お前は鳥だった頃、たった一言の言葉から思いやりと優しさを学び
それを感謝してくれた
次はお前が多くの人に思いやりや優しさを気づかせる番だ」

「人間は言葉を使う
言葉はお前を救ったように大きな力を持っている
言葉は大切に使いなさい」

「お前が過ぎたプールのように本当はみんなひとつなんだ
だから他の誰かを思いやり優しくすることは
自分を癒したりキレイにしていくことにつながるんだよ」

「思いやりや優しさを忘れずキレイな心でいるのなら
周りの人間や自然、すべてのものがお前を助けてくれる
そしてこれからお前の親となる2人が無条件にお前を助け、愛してくれるよ」

僕はもう一度壁に映っている映像を見たよ

お母さんとお父さんが映っていたよ

お母さんは自分のおなかをさすり

お父さんはそれを見て嬉しそうに微笑んでいたんだ

いっぺんに2人を大好きになったよ

この2人の子供になれるんだ

ワクワクして早くお母さんとお父さんに会いたくなったよ

会いに行くよ

僕の記憶がなくなる前に
伝えたいこと

僕は飛べない鳥だったけど
今度はちゃんと飛べたんだ
お母さんのおなかの中へちゃんと飛んでいったよ

会いにきたんだよ

お母さん

僕の役目はね

みんなに思いやりや優しさを気づかせることなんだよ

今のこの世界ではちょっと難しいことかもしれないけど

僕は全然心配していないんだ

だって思いやりや優しさはもともと誰もがもっているものだもん

きっと気づいてくれると思うよ

そうなれば「ありがとう」がいっぱい素敵な世界になるし

僕たちももっとキレイになれるよね

僕はこの世界に生まれて、お母さんとお父さんに会えてとても幸せなんだ
でもね、もうちょっとでこの想いも今までの記憶と一緒になくなっちゃうんだ
理由はよく解らないけど

だからお母さん

僕が思いやりや優しさを忘れそうになったとき、ちゃんとしかってね
僕はそんなことでお母さんを嫌いになったりしないから

あとね

僕はお母さんとお父さんの子供に生まれて幸せだよ

ちゃんと生んでくれてありがとね

大好きだよ

おわり

あとがき

子供たちには不思議な力があります。
何も無いところを見つめていたり、何かに話しかけたり、中には生まれる前にことを覚えている子もいるといいます。
恐らく大人には見えなくなったり聞こえなくなってしまう大切なものを察知したり感じたりする力が子供にはあるんだと思います。
人は何らかの目的や使命を持ってこの世界に生まれ、子供の頃はその目的や使命をきっとまだ覚えているんだと思います。

しかし人は序所にその目的や使命、大切なものを忘れていきます。
心のどこかで大切なものと分かっていながら、競争させられ優劣をつけられる現代の「教育」や「常識」によって押さえ込まれ、思い出させないようにされています。
子供の頃からその「教育」や「常識」を何度も何度も摩り込まれ、大切なものがさほど大切でないものにすげ替えられてしまっているのです。

そういった状況の中、子供たちには大切なものを無くさないで持ち続けてもらうため、大人たちには心のどこかに隠されてしまった大切なものを思い出させるため、双方が共通して読んで感じれる「絵本」をつくりたいと思いました。
「絵本」なら小さな子供も慣れ親しめるし、大人も子供に聞かせるため読んでもらえるし…もしかしたら大人が読み聞かせていくうちに「それ知ってるよ」とか「僕の使命はね」とか子供が大人に教える場面もあったりする新しい「教育」が生み出されればとも考えています。

現在に至っては仏教の考え方や生き方の哲学等の書物が書店でもよく見かけるようになりました。恐らく大切なものが何なのかが見直されてきているのだと思います。いい傾向です。ただ一般的にはまだまだで、例えば会社でそういった話をした場合、宗教チックだのスピリチュアルかぶれだのと煙たがられ、まともに取り合ってくれないのが現実です。たぶん多くの人がそうなのかと思います。そういった人たちでも分かりやすく、より多くの人に違和感なく読んで共感してもらえるよう特殊な用語だったり誤解を招く表現はなるべく控え、とにかくシンプルにみんなが使う言葉で伝えるよう心がけました。

多くの人が「競争」の世界の中で人を出し抜いたり、人より得をしたいという「考え」を持っています。そうやって「教育」されてきたし、それは「常識」となっています。ただ僕の中では「思いやり」や「優しさ」といった自分以外のものを大切に思える「教育」があってもいいのではと思えるんです。心のどこかでくすぶっている暖かいものを掘り起こす「教育」があってもいいと思えるんです。その「教育」が浸透すれば争い事も少なく、あまりストレスのない、多くの人が「幸せ」に思える素敵な世界がくるのではないかと思えるんです。

本当に「ありがとう」がいっぱいの素敵な世界になればいいなと思っています。

お願い

実は今回の物語にはモデルがいます。

前世の記憶や死んでからのあの世の記憶をはっきりと覚えている僕の友人がモデルです。

今回物語を書く上でその友人にあの世のことをいろいろ聞き、できるだけ忠実に描いたつもりです。そういう意味ではこの物語はノンフィクションでもあります。

その友人も言っていました。やはりあの世でも「思いやり」や「優しさ」が大切で、この世界に来る際も心をキレイにし世の中を良くするよう目的・使命を決めてきた（言われてきた）とのことでした。

大切なことは人を出し抜いて得をすることではなく、他人を想う「思いやり」や「優しさ」なのです。

その友人を含め4人で話し合う内に大それたことに「世界を変えよう」とのことになり、（基本は自分が変わらなないと世界は変わらないのですが…）世の中を良くするため自分たちに何かできるのか？となって、子供の教育の懸念から「絵本」を書いたらというひとつの案が持ち上がりました。

稚拙ながら何とか物語はできましたが、絵心もなく、広める手立てもなく、勝手ながらもしこの物語や「絵本による教育改革？」に共感できる方がいらっしゃるようでしたらご協力いただければ嬉しく思います。

もしこの物語に絵を描いていただける、この物語を広めてくれる、いいアドバイスがあるよ等そういった応援・ご協力をいただければ非常に助かります。

何卒よろしくお願いいたします。

作者必然

応援メッセージや具体的なプロジェクトへの関わり方についてはこちらから

→ <http://goo.gl/hTwrV>